新潮文庫

破戒

島崎藤村著

新潮社

破戒

定価はカバーに表示してあります。

新潮文庫 草55 G

昭和二十九年十二月二十五日 発行
昭和四十六年三月二十日 五十九刷改版
昭和四十八年十一月二十日 六十七刷

著者 島崎藤村

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社
郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
電話東京(〇三)(二六〇)一一一一
振替東京八〇八番

乱丁、落丁のものは本社又はお買求めの書店にてお取替えいたします。

印刷・株式会社金羊社 製本・憲専堂製本株式会社
© Kusuo Shimazaki 1954 Printed in Japan

新潮文庫

破戒

島崎藤村著

新潮社版

800

破

戒

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

この書の世に出づるにいたりたるは、函館にある秦慶治氏、及び信濃にある神津猛氏のたまものなり。労作終るの日にあたりて、このものがたりを二人の恩人のまへにささぐ。

第壱章

（一）

蓮華寺では下宿を兼ねた。瀬川丑松が急に転宿を思い立って、借りることにした部屋というのは、その蔵裏つづきにある二階の角のところ。寺は信州下水内郡飯山町二十何カ寺の一つ、真宗に附属する古刹で、丁度その二階の窓に倚凭って眺めると、銀杏の大木を経てて飯山の町の一部分も見える。さすが信州第一の仏教の地、古代を眼前に見るような小都会、奇異な北国風の屋造、板葺の屋根、または冬期の雪除として使用する特別の軒庇から、ところどころに高く顕れた寺院と樹木の梢まで——すべて旧めかしい町の光景が香の烟の中に包まれて見える。ただ一際目立ってこの窓から望まれるものと言えば、現に丑松が奉職しているその小学校の白く塗った建築物であった。

丑松が転宿を思い立ったのは、実は甚だ不快に感ずることが今の下宿に起ったからで。尤も賄でも安くなければ、誰もこんな部屋に満足するものは無かろう。壁は壁紙で張りつめて、それが煤けて茶色になっていた。粗造な床の間、紙表具の軸、外には古びた火鉢が置いてあるばか

りで、何となく世離れた、静寂な僧坊であった。それがまた小学教師という丑松の今の境遇に映って、妙に侘しい感想を起させもする。

今の下宿にはこういう事が起った。半月程前、一人の男を供に連れて、下高井の地方から出て来た大日向という大尽、飯山病院へ入院の為とあって、暫時腰掛に泊っていたことがある。入院は間もなくであった。もとより内証はよし、病室は第一等、看護婦の肩に懸って長い廊下を往ったり来たりするうちには、自然と豪奢が人の目にもついて、誰が嫉妬で噂するともなく、「彼は穢多だ」ということになった。忽ち多くの病室へ伝って、患者は総立。「放逐して了え、今直ぐ、それが出来ないとあらば吾輩挙って御免を蒙る」と腕捲りして院長を脅すという騒動。いかに金尽でも、この人種の偏執には勝たれない。ある日の暮、籠に乗せられて、夕闇の空に紛れて病院を出た。籠はそのままもとの下宿へ舁ぎ込まれて、院長は毎日のように来て診察する。さあ今度は下宿のものが承知しない。丁度丑松が一日の勤務を終って、疲れて宿へ帰った時は、一同「主婦を出せ」と喚き立てるところ。「不浄だ、不浄だ」の罵詈は無遠慮な客の口唇を衝いて出た。「不浄だとは何だ」と丑松は心に憤って、蔭ながらあの大日向の不幸を憐んだり、道理のないこの非人扱いを慨いたりして、穢多の種族の悲惨な運命を思いつづけた——丑松もまた穢多なのである。

見たところ丑松は純粋な北部の信州人——佐久小県あたりの岩石の間に成長した壮年の一人とは誰の目にも受取れる。正教員という格につけられて、学力優等の卒業生として、長野の師範校を出たのは丁度二十二の年齢の春。社会へ突出される、直に丑松はこの飯山へ来た。それから足

掛三年目の今日、丑松はただ熱心な青年教師として、飯山の町の人に知られているのみで、実際穢多である、新平民であるということは、誰一人として知るものが無かったのである。

「では、いつ引越していらっしゃいますか」

と声をかけて、入って来たのは蓮華寺の住職の匹偶。年の頃五十前後。茶色小紋の羽織を着て、瘠せた白い手に珠数を持ちながら、丑松の前に立った。土地の習慣から「奥様」と尊敬められているこの有髪の尼は、昔者として多少教育もあり、都会の生活も万更知らないでも無いらしい口の利き振であった。世話好きな性質を額にあらわして、微な声で口癖のように念仏して、対手の返事を待っている様子。

その時、丑松も考えた。明日にも、今夜にも、と言いたい場合ではあるが、さて差当って引越しするだけの金が無かった。実際持合せは四十銭しかなかった。四十銭で引越しの出来よう筈も無い。今の下宿の払いもしなければならぬ。月給は明後日でなければ渡らないとすると、否でも応でもそれまで待つより外はなかった。

「こうしましょう、明後日の午後ということにしましょう」

「明後日？」と奥様は不思議そうに対手の顔を眺めた。

「明後日引越すのはそんなに可笑いでしょうか」丑松の眼は急に輝いたのである。

「あれ――でも明後日は二十八日じゃありませんか。別に可笑いということは御座ませんがね、私はまた月が変ってから来っしゃるかと思いましてサ」

「むむ、これはおおきにそうでしたなあ。実は私も急に引越しを思い立ったものですから」

と何気なく言消して、丑松は故意と話頭を変えて了った。下宿の出来事は烈しく胸の中を騒がせる。それを聞かれたり、話したりすることは、何となく心に恐しい。何か穢多に関したことになると、毎時もそれを避けるようにするのがこの男の癖である。

「なむあみだぶ」

と口の中で唱えて、奥様は別に深く掘って聞こうともしなかった。

（二）

蓮華寺を出たのは五時であった。学校の日課を終ると、直ぐその足で出掛けたので、丑松はまだ勤務のままの服装で居る。白墨と塵埃とで汚れた着古しの洋服、書物やら手帳やらの風呂敷包を小脇に抱えて、それに下駄穿、腰弁当。多くの労働者が人中で感ずるような羞恥――そんな思を胸に浮べながら、鷹匠町の下宿の方へ帰って行った。町々の軒は秋雨あがりの後の夕日に輝いて、人々が濡れた道路に群っていた。中には立ちとどまって丑松の通るところを眺めるもあり、何かひそひそ立話をしているのもある。「彼処へ行くのは、ありゃあ何だ――むむ、教員か」と言ったような顔付をして、酷しい軽蔑の色を顕しているのもあった。これが自分等の預っている生徒の父兄であるかと考えると、浅ましくもあり、腹立たしくもあり、遽に不愉快になってすたすた歩き初めた。

本町の雑誌屋は近頃出来た店。その前には新着の書物を筆太に書いて、人目を引くように張出してあった。かねて新聞の広告で見て、出版の日を楽みにしていた『懺悔録』――肩に猪子蓮太

郎氏著、定価までも書添えた広告が目につく。立ちどまって、その人の名を思出してさえ、丑松はもう胸の踊るような心地がしたのである。見れば二三の青年が店頭に立って、何か新しい雑誌でも猟っているらしい。丑松は色の褪せたズボンの袖嚢の内へ手を突込んで、人知れず銀貨を鳴らしてみながら、幾度かその雑誌屋の前を往ったり来たりした。とにかく、四十銭あれば本が手に入る。しかしそれを今ここで買って了えば、明日は一文無しで暮さなければならぬ。転宿の用粗悪しなければならぬ。こういう思想に制せられて、一旦は往きかけてみたようなものの、やがて復た引返した。ぬっと暖簾を潜って入って、手に取って見ると——それはすこし臭気のするような、粗悪な洋紙に印刷した、黄色い表紙に『懺悔録』としてある本。貧しい人の手にも触れさせたいという趣意から、わざと質素な体裁を択んだのは、この書の性質をよく表している。ああ、多くの青年が読んで知るという今の世の中に、飽くことを知らない丑松のような年頃で、どうして読まず知らずにいることが出来よう。智識は一種の饑渇である。到頭四十銭を取出して、欲いと思うその本を買求めた。なけなしの金とはいいながら、精神の慾には替えられなかったのである。

『懺悔録』を抱いて——買って反って丑松は気の衰頽を感じながら、下宿をさして帰って行くと、不図、途中で学校の仲間に出逢った。一人は土屋銀之助と言って、師範校時代からの同窓の友。一人は未だ極く年若な、この頃準教員に成ったばかりの男。散歩とは二人のぶらぶらやって来る様子でも知れた。

「瀬川君、大層遅いじゃないか」

と銀之助は洋杖を鳴しながら近いた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo

正直で、しかも友達思いの銀之助は、直に丑松の顔色を見て取った。深く澄んだ目付は以前の快活な色を失って、言うに言われぬ不安の光を帯びていたのである。「ああ、必定身体の具合でも悪いのだろう」と銀之助は心に考えて、丑松から下宿を探しに行った話を聞いた。

「下宿を？　君はよく下宿を取替える人だねえ――此頃あそこの家へ引越したばかりじゃないか」

と毒の無い調子で、さも心から出たように笑った。その時丑松の持っている本が目についたので、銀之助は洋杖を小脇に挾んで、見せろという言葉と一緒に右の手を差出した。

「これかね」と丑松は微笑みながら出して見せる。

「むむ、『懺悔録』か」と準教員も銀之助の傍に倚添いながら眺めた。

「相変らず君は猪子先生のものが好きだ」こう銀之助は言って、黄色い本の表紙を眺めたり、一寸内部を開けて見たりして、「そうそう新聞の広告にもあったッけ――へえ、こんな本かい――こんな質素な本かい。まあ君のは愛読を通り越して崇拝の方だ。ははははは、よく君の話には猪子先生が出るからねえ。さぞかしまた聞かせられることだろうなあ」

「馬鹿言いたまえ」

と丑松も笑ってその本を受取った。

夕靄の群は低く集って来て、あそこでも、ここでも、最早ちらちら灯が点く。丑松は明後日あたり蓮華寺へ引越すという話をして、この友達と別れたが、やがて少許行って振返って見ると、銀之助は往来の片隅に佇立んだまま、熟と是方を見送っていた。半町ばかり行って復た振返って

見ると、未だ友達は同じところに佇立んでいるらしい。夕餐の煙は町の空を籠めて、悄然とした友達の姿も黄昏れて見えたのである。

（三）

鷹匠町の下宿近く来た頃には、鉦の声が遠近の空に響き渡った。寺々の宵の勤行は始ったのであろう。丁度下宿の前まで来ると、あたりを警める人足の声も聞えて、提灯の光に宵闇の道を照しながら、一挺の籠が舁がれて出るところであった。ああ、大尽が忍んで出るのであろう、と丑松は憐んで、黙然として其処に突立って見ているうちに、いよいよそれとは附添の男で知れた。同じ宿に居たとは言いながら、ついぞ丑松は大日向を見かけたことが無い。唯附添の男ばかりは、よく薬の罎なぞを提げて、出たり入ったりするところを見かけたのである。その雲を突くような大男が、今、尻端折りで、主人を保護したり、人足を指図したりする甲斐々々しさ。穢多の中でも卑賤しい身分のものと見え、其処に立っている丑松を同じ種族とは夢にも知らないで、妙に人を憚るような様子して、一寸会釈しながら側を通りぬけた。門口に主婦、「御機嫌よう」の声も聞える。見れば下宿の内は何となく騒々しい。人々は激昂したり、憤慨したりして、いずれも聞えよがしに罵っている。

「難有うぞんじます——そんなら御気をつけなすって」

とまた主婦は籠の側へ駈寄って言った。籠の内の人は何とも答えなかった。丑松は黙って立った。見る見る舁がれて出たのである。

「ざまあ見やがれ」

これが下宿の人々の最後に揚げた凱歌であった。

丑松がすこし蒼ざめた顔をして、下宿の軒を潜って入った時は、未だ人々が長い廊下に群っていた。いずれも感情を制えきれないという風で、肩を怒らして歩くもあり、板の間を踏み鳴らすもあり、中には塩を摑んで庭に蒔散らす弥次馬もある。主婦は燧石を取出して、清浄の火と言って、かちかち音をさせて騒いだ。

哀憐、恐怖、千々の思は烈しく丑松の胸中を往来した。病院から追われ、下宿から追われ、その残酷な待遇と恥辱とをうけて、黙って舁がれて行くあの大尽の運命を考えると、さぞ籠の中の人は悲慨の血涙に噎んだであろう。大日向の運命はやがてすべての穢多の運命である。思えば他事では無い。長野の師範校時代から、この飯山に奉職の身となったまで、よくまあ自分は平気の平左で、普通の人と同じような量見で、危いとも恐しいとも思わずに通り越して来たものだ。こうなると胸に浮ぶは父のことである。父というのは今、牧夫をして、烏帽子ヶ岳の麓に牛を飼って、隠者のような寂しい生涯を送っている。丑松はその西乃入牧場を思出した。その牧場の番小屋を思出した。

「阿爺さん、阿爺さん」

と口の中で呼んで、自分の部屋をあちこちあちこちと歩いてみた。不図父の言葉を思出した。はじめて丑松が親の膝下を離れる時、父は一人息子の前途を深く案じるという風で、さまざまな物語をして聞かせたのであった。その時だ——一族の祖先のことも言い聞かせたのは。東海道

の沿岸に住む多くの穢多の種族のように、朝鮮人、支那人、露西亜人、または名も知らない島々から漂着したり帰化したりした異邦人の末とは違い、その血統は古の武士の落人から伝ったもの、貧苦こそすれ、罪悪の為に穢れたような家族ではないと言い聞かせた。父はまた添付して、世に出て身を立てる穢多の子の秘訣——唯一つの希望、唯一つの方法、それは身の素性を隠すより外に無い、「たとえいかなる目を見ようと、いかなる人に邂逅おうと決してそれとは自白けるな、一旦の憤怒悲哀にこの戒を忘れたら、その時こそ社会から捨てられたものと思え」こう父は教えたのである。

一生の秘訣とはこの通り簡単なものであった。「隠せ」——戒はこの一語で尽きた。しかしその頃はまだ無我夢中、「阿爺が何を言うか」位に聞流して、唯もう勉強が出来るという嬉しさに家を飛出したのであった。楽しい空想の時代は父の戒も忘れ勝ちに過ぎた。急に丑松は少年から大人に近いたのである。急に自分のことが解って来たのである。まあ、面白い隣の家から面白くない自分の家へ移ったように感ずるのである。今は自分から隠そうと思うようになった。

(四)

あおのけさまに畳の上へ倒れて、暫時丑松は身動きもせずに考えていたが、やがて疲労が出て眠て了った。不図目が覚めて、部屋の内を見廻した時は、点けて置かなかった筈の洋燈が寂しそうに照して、夕飯の膳も片隅に置いてある。自分は未だ洋服のまま。丑松の心地には一時間余も眠ったらしい。戸の外には時雨の降りそそぐ音もする。起き直って、買って来た本の黄色い表紙

を眺めながら、膳を手前へ引寄せて食った。飯櫃の蓋を取って、あつめ飯の臭気を嗅いでみると、丑松は最早嘆息して了って、そこそこにして膳を押遣ったのである。『懺悔録』を披げて置いて、先ず残りの巻煙草に火を点けた。

この本の著者――猪子蓮太郎の思想は、今の世の下層社会の「新しい苦痛」を表白すと言われている。人によると、あの男ほど自分を吹聴するものは無いと言って、妙に毛嫌するような手合もある。なるほど、その筆にはいつも一種の神経質があった。到底蓮太郎は自分を離れて説話をすることの出来ない人であった。しかし思想が剛健で、しかも観察の精緻を兼ねて、人を吸引ける力の壮んに溢れているということは、一度その著述を読んだものの誰しも感ずる特色なのである。蓮太郎は貧民、労働者、または新平民等の生活状態を研究して、社会の下層を流れる清水に掘りあてるまでは倦まず撓まず努力めるばかりでなく、またそれを読者の前に突着けて、右からも左からも説明して　呑込めないと思うことは何度繰返しても、読者の腹の中に置かなければ承知しないという遣方であった。尤も蓮太郎のは哲学とか経済とかの方面からそういう問題を取扱わないで、寧ろ心理の研究に基礎を置いた。文章はただ岩石を並べたように思想を並べたもので、露骨なところに反って人を動かす力があったのである。

しかし丑松が蓮太郎の書いたものを愛読するのは唯それだけの理由からでは無い。新しい思想家でもあり戦士でもある猪子蓮太郎という人物が穢多の中から産れたという事実は、丑松の心に深い感動を与えたので――まあ、丑松の積りでは、隠に先輩として慕っているのである。同じ人間でありながら、自分等ばかりそんなに軽蔑される道理が無い、という烈しい意気込を持つよう

になったのも、実はこの先輩の感化であった。こういう訳から、蓮太郎の著述といえば必ず買って読む。雑誌に名が出る、必ず目を通す。読めば読む程丑松はこの先輩に手を引かれて、新しい世界の方へ連れて行かれるような気がした。穢多としての悲しい自覚はいつの間にかその頭を擡げたのである。

今度の新著述は、「我は穢多なり」という文句で始めてあった。その中には同族の無智と零落とが活きた画のように描いてあった。その中には多くの正直な男女が、ただ穢多の生れというばかりで、社会から捨てられて行く光景も写してあった。その中には又、著者の煩悶の歴史、歓しい哀しい過去の追想、精神の自由を求めて、しかもそれが得られないで、不調和な社会の為に苦みぬいた懐疑の昔語から、朝空を望むような新しい生涯に入るまで――熱心な男性の嗚咽が声を聞くように書きあらわしてあった。

新しい生涯――それが蓮太郎には偶然な身のつまずきから開けたのである。生れは信州高遠の人。古い穢多の宗族ということは、丁度長野の師範校に心理学の講師として来ていた頃――丑松がまだ入学しない以前――同じ南信の地方から出て来た二三の生徒の口から泄れた。講師の中に賤民の子がある。この噂が全校へ播った時は、一同驚愕と疑心とで動揺した。ある人は蓮太郎の人物を、ある人はその容貌を、ある人はその学識を、いずれも穢多の生れとは思われないと言って、どうしても虚言だと言張るのであった。放逐、放逐、声は一部の教師仲間の嫉妬から起った。嗚呼、人種の偏執ということが無いものなら、「キシネフ」で殺される猶太人もなかろうし、西洋で言囃す黄禍の説もなかろう。無理が通れば道理が引込むというこの世の中に、誰が穢多の子

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbo